

川越ロータリークラブ 会報 No.22



2025年12月9日 第3550回例会 会場：氷川会館

会員数：103名 免除出席者：7名 正会員出席者：45名 出席者：52名 出席率：58.43%

プログラム

氷川会館集合（7:45）／氷川神社境内の清掃・祈願／点鐘（8:30）／氷川会館で朝食／会長の時間／幹事報告／委員長報告／ニコニコボックス／卓話／点鐘（9:30）（司会：山崎SAA）

《卓話講師紹介》

氷川神社・氷川会館 宮司・館長 山田禎久会員



境内の清掃・祈願

境内の清掃 7:45に氷川会館に集合のうえ、氷川神社境内にて落ち葉の清掃を実施。

祈願

清掃終了後、氷川神社拝殿にて御祈願を実施。

会長の時間

2025-26年度会長 吉澤 徳安

- ・本日は朝早くから有難うございました。初めての試みでありどの程度参加頂けるか心配しましたが、沢山の方に参加頂き安心しました。
- ・本日の移動例会は、私の年度の目標である「例会を魅力的なものにしよう」の一環として企画いたしました。
- ・山田宮司に移動例会について相談したところ、ご快諾のうえ、色々アイデアも頂き、改めて、こうした機会を頂き有難うございました。
- ・山田宮司には毎年ロータリーの年度事業計画書にて「川越市の歴史」を執筆頂いており、今年は少し変わったものをとお願いしたところ、川越拘置所の教説師としての活動や、川越家庭裁判所に行く子供達を神社に招き、境内清掃を

体験させていたる話を聞き、大変感銘を受けました。結局、年度事業計画書は前例踏襲となりましたが、山田宮司に作成頂いた「日本人の感性」は大変参考になる内容なので、本日各テーブルに配付させて頂いています。

- ・今年度、例会を魅力的にするため色々取組んできましたが、例会の出席率は上がっても出席者はあまり変わらない点が課題です。
- ・一方、飯能RCは出席率80~90%で推移しており、川越RCの姉妹クラブである東京世田谷RCも会員数80人で出席率は90%前後のことです。両クラブとも特別なことはしておらず、コロナ以降、自然と集まるようになったと聞いています。
- ・出席率向上には小手先の対応ではなく、1905年にポール・ハリスがロータリークラブを創設した時のように、忙しい日々の中で「安らぎ」を求めて集まる場を提供することが大切だと思います。
- ・今年度も残り6ヶ月、安らぎの場としての例会運営を心掛けていきたいと思います。

幹事報告

2025-26年度 幹事 高橋 哲彦

- ・次回12/19はクリスマス家族夜間例会。18:00開始なのでご留意願います。
- ・坂口ガバナーご葬儀：12/9通夜、12/10告別式

ニコニコボックス

●川越氷川神社山田宮司、又スタッフの方々本日はありがとうございます。山田宮司卓話もありがとうございます。楽しみです。<会長、幹事>合計2,000円

卓話

講師：氷川神社・氷川会館 宮司・館長

山田 穎久（やまだ よしひさ）会員



先ずは朝早くから沢山の方に境内清掃のご奉仕を頂き感謝します。氷川神社境内にはけやき等の落葉樹が多く、この季節は毎日落ち葉を掃きながら、秋には温かい日差しを届け、夏には日陰を作ってくれていることに想いを馳せています。

本日は年末年始ということもあり、神社や日本に関する話をさせて頂きます。

「師走」…師とは教師ではなく、伊勢神宮の神主である「御師」のこととされています。御師は年末になると伊勢神宮のお札を日本中の神社に配るため、全国各地を行脚していたことから「師走」と言うようになりました。

「年」…漢字の成り立ちとして、稻の実り、稻作の周期を表します。神社においても2月の祈年祭で豊作を祈り、11月の新嘗祭（今の勤労感謝の日）で収穫に感謝する祭祀が行われています。

「宝」…秩父三社（秩父、三峯、宝登山）の一つ、宝登山神社の宮司のお話として、「宝物」とは「田から成るもの」、即ち稻を表しているとのことです。お百姓さんの努力だけでなく、適度な日差し、雨、風があって初めて稻が宝物のように豊かに実るさまを表しています。

「冬」…語源については諸説あり、「冷ゆ（冷える）」が変化したという説もあれば、「殖ゆ（増える、増やす）」が転じたという説も有力です。後者は動物・植物が力を蓄える時期ということで、一見冷たく厳しい季節を、増える・増やす時期と考えた日本人の精神性は美しく力強いと思います。冬を乗り越え、春は蓄えた力が「張っている」状態で、そこから花や芽が一斉に開くことを表しています。

「言霊（ことだま）」…日本人は言葉には力があると考えています。一例として「国誉め」があり、朝廷から地方に派遣された国司の最初の仕事は赴任地について言葉を尽くして褒め称えることであり、そうすることによって国が豊かになるとされていました。

「祝詞（のりと）」…神道の祭祀において神に唱える言葉ですが、構成としては最初に神様を褒め称えた上で、お願ひごとを述べるものとなっています。これも言霊の一つです。

「七巻半」…祝詞を書いた紙は7回巻いて半分残す「七巻半」が決まりとなっています。神事で使う藁を巻いた座布団も七巻半。末広がりや八百万の神等、日本人には数字の「8」が特別な意味を持っており、そこに少しへりくだり7.5としているそうです。

「人の噂も七十五日」と言いますが、噂というものは神ではなく人によって作られたものだから、いざれは収まるということです。

「伊勢参り」…川越は多くの観光客で賑わっていますが、江戸時代は伊勢参りが大流行し、中には「抜け参り」と言って周囲の人に黙って伊勢参りをするケースもありました。この場合は餞別も少なかったですが、柄杓を目印に持っていくことで参道の住民が食事や宿泊等、様々な支援をしてくれました。これを「施行（せぎょう）」と言い、徳を積む行為とされていました。

「土産（みやげ）」…元々は「宮笥」と書き、伊勢参りで貰ったお札を持ち帰る箱のこと。帰宅後、お世話になった人にお札を配ったことから今の意味になったと言われています。

「長くて、新しい」…日本では組織を率いる人の肩書に「長」を用います。日本人は組織は大きく強いだけでなく、長く続くことを大事にしてきました。伊勢神宮は1300年に渡って20年毎に式年遷宮により社殿・ご神体等を一新してきました。安倍元総理はG7伊勢志摩サミットで伊勢神宮を「最も古く最も新しい場所」と紹介しました。「新しい」は「あらた」、即ち繰り返し改まることがあります。

「文脈性のある更新」を続けるのが日本が長持ちする秘訣だと思います。

「常若（とこわか）」…伊勢神宮を表す言葉。常に若々しく、長く続くのが日本の理想の一つです。新しい年を迎える、皆さんが若々しく穏やかに過ごされ、川越RCも長い歴史を受け継ぎ発展していくことをお祈りしています。

